

京城帝国大学における韓国儒教研究活動

その他のタイトル	A Research on the Academic Activities about Korean Confucianism in Keijo Imperial University
著者	李 曉辰
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	8
ページ	181-196
発行年	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/9161

京城帝国大学における韓国儒教研究活動

李 曉 辰

A Research on the Academic Activities about Korean Confucianism in Keijo Imperial University

Lee, Hyojin

In this paper, I will elucidate what kind of academic activities were done by the scholars who study Korean Confucianism in Keijō Imperial University. For this, I focus on the Joseon governor general office's policy and connection with Kyeonghakwon. In 1911, Joseon governor general office changed Seongkyunkwan that was the highest education system in Joseon period to Kyeonghakwon and curtailed its educational function. After establishment of Keijō Imperial University in 1926, the educational and researching function started to transfer to Keijō Imperial University while Takahashi Tōru and Fujitsuka Chikashi were producing achievements about Korean Confucianism. After Kyeonghakwon established Myeonryungakuin the education institute, Takahashi and Fujitsuka became a professor both Keijō Imperial University and Kyeonghakwon. As well as the activities for the Joseon governor general office, they also produced amount of research on Korean Confucianism. Generally, they published their works on the academic journal such as *Keijō Imperial University Hobungakgakkai dai ni bu ronsan*, *Chosen, Chosen and Manshu*, and *Bunkyo no Chosen* in Korea, *Shibun* and *Kangakukai Journal* in Japan. Takahashi and Fujitsuka also gave speech in both Korea and Japan, and the Japanese professors like a Hattori Unokichi and Uno Tetsuto who related with them held some lectures or speech in Korea, and published thesis in Korean Journals. Thus, the studies of Korean Confucianism in Keijo Imperial University were closely connected with Joseon governor general office's policy and Japanese academy field.

キーワード：京城帝国大学 近代韓国儒教 経学院 高橋亨 藤塚鄰 阿部吉雄

はじめに

本論文の目的は、京城帝国大学における韓国儒教研究者の高橋亨・藤塚鄰・阿部吉雄の三人をとり上げ、当時日韓の主要な儒教機関および学術雑誌での彼らの韓国儒教研究活動を探ることである。

京城帝国大学における韓国儒教研究は、上記の高橋・藤塚・阿部を中心とする教員たちによって発展し、ある種の現象としてその存在を現わしていた。韓国儒教研究者たちは東京帝国大学において研究の基盤を築き、互いに先生と学生、先輩と後輩として強く結びついていた。彼らが行なった韓国儒教研究は、当時の韓国内部だけではなく、同時的に日本においても発信されていたのである。一方、彼らの研

究は朝鮮総督府の儒教利用政策と相まって、政治的性格を有するケースも少なくなかった。

朝鮮総督府により1911年6月に成均館に設置された「経学院」は、儒教を利用して当時地方で実質的に影響力を持っていた儒林勢力を懐柔しようとした総督府の朝鮮支配のための道具であった¹⁾。初期の経学院は、両班・儒林集団の懐柔と監視が主たる活動であったが、徐々に朝鮮人全般にわたって教化の役割を担うようになった²⁾。成均館が有していた教育機能は廃止されて儀礼の機能だけが維持されることとなり、一方講演会などを通じた社会教化活動も行なっていた。1913年からは主要事業の一環として『経学院雑誌』が創刊され、1944年まで絶えず刊行された。1930年にはその教育機能が復活し「明倫学院」が設置されるようになった³⁾。さらに、日中戦争以降、日本の「内地」と植民地全体が戦時期に入り、強力な戦時総動員体制が要求され、儒教界では「皇道儒道」が提唱され、1939年には全朝鮮地域の儒教団体を統合する「朝鮮儒道聯合会」が発足した⁴⁾。注目すべきことは、この一連の過程に京城帝国大学の韓国儒教研究者が深く関わっていることである。

京城帝国大学は、教育機能であるとともに研究所としての性格も強く有していたため、学術的活動も活発に行なわれた。東洋哲学および韓国儒教研究の成果の発信は、韓国と日本両国において主に雑誌上で行なわれた。京城帝国大学の法文学部が刊行した『法文学会論纂』はもとより、『朝鮮及満州』や『文教の朝鮮』などの韓国で刊行される雑誌に論文や随筆が載せられ、日本側では、主に斯文会の雑誌『斯文』、『支那学研究』、『漢学会雑誌』や東方文化学院などを中心に東洋哲学の研究結果が発表された。また、彼らは京城帝国大学を拠点としながらも、植民地時代の代表的儒教機関である経学院と相互協力して教育と講演会などの活動も行なった。

本論文では、総督府の儒教政策の変化が京城帝国大学における韓国儒教研究にどのような影響を及ぼしていたのかを経学院とのかかわりを中心に究明する。また、京城帝国大学の韓国儒教研究者が活動した団体や雑誌を検討し、論文発表や講演などの活動を中心に、京城帝国大学で行なわれた韓国儒教研究の伝播とその形態を明らかにするとともに、その過程と特徴について考察したい。

-
- 1) 経学院の沿革と性格については、鄭圭永「朝鮮総督府의 朝鮮儒教支配」(『学生生活研究』第4輯、清洲教育大学校学生生活研究所、1996年)、柳美那「植民地 権力에의 強力과 挫折」(『韓国文化』36、2005年12月)、同「19c 말-20c 초 日本帝国主義의 儒教 利用과 朝鮮 支配」(『東洋史学研究』第111輯、2010年)、同「日本の '朝鮮 臣民化' 政策과 儒林 動員의 実態」(『日本学』第31輯、東国大学校日本学研究所、2010年)、정옥재「日帝協力儒林의 儒教認識 —— 1910~1920년대 経学院 關係者를 中心으로」(『韓国史学史學報』Vol.16、韓国史学史学会、2007年)、同「1910~1920年代 経学院의 人的 構成과 役割」(『精神文化研究』第30巻第1号、韓国学中央研究院、2007年3月)、박영미「経学院에 보이는 近代 日本 儒学의 傾向」(『日本学研究』Vol.27、단국대학교 일본연구소、2009年)などを参照されたい。
 - 2) 柳美那「植民地期 朝鮮의 明倫学院——朝鮮総督府의 儒教知識人 政策과 朝鮮人의 対応」(『教育史学研究』17巻1号、韓国教育史学会、2007年)54頁。
 - 3) 明倫学院の設立の理由については、注2所掲の柳美那「民地期 朝鮮의 明倫学院——朝鮮総督府의 儒教知識人 政策과 朝鮮人의 対応」57-59頁を参考されたい。
 - 4) 柳美那「戦時体制期 朝鮮総督府의 儒林政策」(『역사와현실』第63号、韓国歴史研究会、2007年3月)310-311頁。

一、総督府の儒教利用政策と京城帝国大学の韓国儒教研究

1. 儒教に対する総督府の対応

1890年に発表された「教育勅語」は、儒教を基盤として天皇に対する忠誠心を重視するものであった。この教育勅語の起草に深く関わっていた元田永孚は、「天皇尊崇」を中心に儒教道徳の再編を図った⁵⁾。「教育勅語」は、儒教にもとづく仁義と国体論にもとづく忠孝を教育の基本にすべしとする元田の教学論が具体化した国教の制定であった⁶⁾。「教育勅語」にもとづく天皇制イデオロギーは、朝鮮人の同化政策の手段として教育政策に導入された⁷⁾。1911年（第一次）「朝鮮教育令」が頒布され、「第二条 教育ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ忠良ナル国民ヲ育成スルコトヲ本義トス」と表れているように、天皇制教育が制度的に確立されたのである。

国家思想として朝鮮時代の社会に多大な影響を与えていた儒教は、日本が韓国を支配する際、最も考慮すべき点の一つであった。朝鮮統治においても、表面的に「教育勅語」を標榜していたわけではなかったが、植民地経営のために儒教を利用しようとしていた⁸⁾。日韓併合の前から学政参与官として韓国に滞在していた幣原坦も、このような韓国社会における儒教の意味について洞察していた。彼は1905年4月に「韓国教育改良案」⁹⁾によって韓国の教育について多様な意見を提起する際、「第四 成均館ノ改革」において「成均館」の改革について言及している。

在京城ノ成均館ハ純然儒生ヲ教エル所ニシテ全リ旧時ノ遺物タリ然リト最モ其重ンセラルノコトハ館長ノ勅任官タルテ見テモ知ベキ也将来之ヲ改革シテ韓国實際ニ於ケル大学トシ其学生ハ主トシテ高等学校又ハ師範学校ノ卒業生ヨリ取り官吏又ハ教官タルニ必要ナル教育ヲ施ス所トスベシ¹⁰⁾

幣原は成均館を改革して大学を創るという構想を持っていたようである。結果的には、この提案は受け入れられず、むしろ1911年経学院が設立されることにより、成均館の教育機能は失われたが、韓国に根付いている儒教を尊重しながら制度を考える必要があるということは認知していたのである。このような韓国儒教に対する関心と重要性の認識は、併合を前後としてより高まっていった。併合後は、「朝鮮教育調査委員」¹¹⁾が参加した第一回委員会において、朝鮮教育方針に関する主な4項目を述べたが、その

5) 久木幸男「明治儒教と教育——1880年代を中心に」（『横浜国立大学教育紀要』28集、1988年）259頁。

6) 森川輝紀「元田永孚と教学論」（『埼玉大学紀要教育学部』59、埼玉大学教育学部、2010年）146-152頁。元田の教学思想については森川輝紀の『国民道徳論の道「伝統」と「近代化」の相克』（三元社、2003年）を参考されたい。

7) 鄭泰峻「植民地朝鮮における『教育勅語』の普及論理」（『日本語教育』17号、韓国日本語教育学会、2000年）407頁。

8) 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）95-96頁。

9) 幣原は1905年4月の「韓国教育改良案」をはじめ、同8年に「教育改良ニ関スル件」、同10月に「教育改良ニ関スル件」、同11月に「日韓新協約ノ影響トシテノ学部内ノ状況報告」、同12月に「韓国学政改善ノ概況報告」などの報告書を提出した（佐藤由美『植民地教育政策の研究：朝鮮・1905-1911』、竜溪書舎、33-34頁）。

10) 幣原坦「韓国教育改良案（明治38年4月）」（渡部学・阿部洋編『日本植民地教育政策資料集成（朝鮮篇）』第63巻所収）。

11) 幣原坦、三土忠造、小泉又一、戸野周次郎、中川謙次郎、佐々木吉三郎、多田房之輔、伊沢修二、古川平吉、沢柳

中の二つが「儒教思想を破壊しない」と「『教育勅語』の徹底」であり、朝鮮統治において「儒教」が持つ意義を十分熟知していたことがわかる¹²⁾。

日韓併合直後において韓国の儒教は、仏教・基督教と共に広い意味で韓国宗教の領域で扱われており、宗教を利用する同化政策を基盤として儒教政策が決められた¹³⁾。日韓併合後、従来の「旧慣制度調査」を総督府の取調局が担当し、既存の旧制度慣習などの調査の範囲を一層拡大し、朝鮮全土に亘って各地の慣習の調査および典籍の募集を行なった¹⁴⁾。この調査の囑託として活動した高橋亨は、1911年の三南地方を訪問してから地方の儒林勢力が持つ影響力と儒教の大事さを体験し、儒教研究を始めたという¹⁵⁾。

しかし、1915年8月に公布された「布教規則」(総督府令83号)では、「第一条 本令ニ於テ宗教ト称スルハ神道、仏道及基督教ヲ謂フ」と述べ、儒教を宗教の範囲から除いたのである¹⁶⁾。法令上の区分としては「宗教」ではないものの、儒教に関しても「経学院」や「明倫学院」の運営を通じて、さらに「地方改良」の枠内で事実上所管を行なっていた¹⁷⁾。鄭圭永は、このような経学院の設置と運営について「日韓併合後にあった最も重要な朝鮮総督府の儒教政策は、成均館を廃止し、経学院を設置し、朝鮮儒教を日本植民地主義の文化的装置として再編しようとした。この時期に朝鮮総督府の朝鮮儒教支配の構造は確立され、その後大きな変化なくその骨格が維持され1945年まで存続された」¹⁸⁾と述べ、儒教利用政策の核心に経学院が位置していることを指摘した。総督府が経学院を中心に儒教および儒教知識人たちを利用したのは、まず儒教の「忠・孝」理念を天皇に対する忠誠心培養に用い、また農村社会の有力者である儒林の反発を抑え、支配政策に協力するよう導くためであった¹⁹⁾。そして、社会教化と宣伝の役割を遂行させ、戦時期においては皇道儒学の提唱するまでに至った²⁰⁾。

ここで、もう一つ注目すべき点は、総督府の儒教利用政策の対象であった経学院や明倫学院と京城帝国大学の韓国儒教研究者らが深く関与していたことである。実際、これらの機関は、政策的にも人脈的にも総合的につながっていたのである。

政太郎、樋口勘次郎(久保田優子「帝国教育会「朝鮮教育方針建議案」の作成過程——「教育勅語」について」【九州産業大学国際文化学部紀要】29、九州産業大学、2004年)。

12) 「内国彙報(集会一東:朝鮮教育調査会)」(『教育界』第9巻第12号、金港堂、1910年10月)109頁。

13) 박승길「日帝 武断 統治 時代の 宗教 政策과 그 影響」(『社会史 歴史』Vol.35、韓国社会史学会、1992年)、青柳南冥の『朝鮮宗教史』(朝鮮研究会、1911年)において儒教は宗教として取り扱われていた。

14) 朝鮮総督府中枢院編『朝鮮旧慣制度調査事業概要』(朝鮮総督府中枢院、1938年)21頁。

15) 高橋亨「緒言」『李朝仏教』(寶文館、1929年)7-8頁。

16) 儒教が宗教から除外されたのは社会教化の促進のため儒教の宗教的機能を保留した方が良いという寺内総督の意見に依るものであった(姜潤祚『日本統治下 韓国の 宗教와 政治』(大韓基督教書会、1977年)93頁から再引用)。

17) 永島弘紀「朝鮮総督府の「社会教育」と「地方改良」」(松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地:朝鮮・台湾・満洲』、思文閣出版、2013年)195頁。

18) 注1所掲の鄭圭永「朝鮮総督府의 朝鮮儒教支配」60頁。

19) 注1所掲의 정옥재「日帝協力儒林의 儒教認識——1910~1920년대 経学院 關係者를 中心으로」226-227頁。

20) 注1所掲의 정옥재「日帝協力儒林의 儒教認識——1910~1920년대 経学院 關係者를 中心으로」222頁。

2. 京城帝国大学における漢学科設置の試みと挫折

日本政府の朝鮮統治政策は1919年の三・一独立運動を基準として大きく変わったが、教育政策の面においてもそれは同様であった。総督府は教育の支配性を広めるための学校の増設と、社会上層部の不満の吸い上げを試みることとなった²¹⁾。幣原が試みたが実行できなかった儒教教育機関を設置しようとする動きは、この時期に改めて現われた。鄭圭永は、齋藤総督が日本の斯文会のメンバーであり、儒教に対して深い関心を持っていたことを指摘し、政策に積極的に儒教を取り入れようとしていたことを明らかにした²²⁾。1926年に齋藤総督は明倫学院を構想する際に、京城帝国大学との連帯を試みていた。

殆ンド死物視セラルル儒林ヲ改善シテ世道人心ニ有益ナルモノトシタキ希望其方法ハ帝国大学ニ於テ斯界権威アル教授ヲシテ儒林青少年ヲ召集シ時世ノ進運ニ伴フベク漢学其他ノ科目ヲ教習セシムルコト（道知事ノ見込ミ依リ必シモ儒林ニ限ルヲ要セズ）形式ハ経学院ヨリ大学ニ依属スルコトトスルコト

費用ハ郷校財産収入ヨリ出サシムルコト

毎年人員ヲ定メ各道知事ヨリ指定人員ヲ選出スルコト

卒業生ノ中優秀ナル者ヲ経学院講師及分廟職員業ニ充ルコト²³⁾

以上のことからわかるように、齋藤総督は、京城帝国大学に「漢学」の科目を置き、そこで儒教教育を任せようとしていた。しかし、齋藤の構想は実現せず、韓国儒教の教育は明倫学院に回されるようになった。齋藤総督は、韓国儒教を担当する教員として、既に韓国儒教研究者として知られていた高橋を念頭に置いていた²⁴⁾。また高橋と共に、京城帝国大学の赴任以来、韓国儒教の研究を進めていた支那哲学講座の藤塚も明倫学院の講師を担当するようになった。京城帝国大学に韓国儒教を教える講座を創ろうとした齋藤総督の計画は、高橋と藤塚によって一部実現されたといえよう。その結果、京城帝国大学は韓国儒教の研究機関として、明倫学院は教育機関としての性格を強く保ち続けたのである。藤塚の後任として阿部吉雄が支那哲学講座に招聘され李退溪を研究したことから考えると、「支那哲学講座」は必ずしも中国の哲学を研究する場ではなく、儒道政策の一環として「韓国儒教」を研究する場となったことを意味するのであろう²⁵⁾。

21) 佐野通夫「教育の支配と植民地の支配」（阿部洋代表『戦前日本の植民地教育政策に関する総合的研究』（平成4・5年度科学研究費補助金（総合A）研究成果報告書）所収、1994年）51頁。

22) 鄭圭永「京城帝国大学に見る戦前日本の高等教育と国家」（東京大学博士論文、1995年）154頁。

23) 齋藤総督自筆覚書「明倫学院ノ構想」（国立国会図書館憲政資料質所蔵『齋藤実文書』（4）350）、注22所掲の鄭圭永「京城帝国大学に見る戦前日本の高等教育と国家」、154頁から引用。

24) 注22所掲の鄭圭永「京城帝国大学に見る戦前日本の高等教育と国家」154頁。

25) しかし、この時期の韓国儒教研究は、日本儒学の影響の中の皇道儒学としてその性格が変わっていた（注1所掲の정옥재「日帝協力儒林의 儒教認識-1910~1920년대 경학원 관계자를 중심으로」、246頁）。すなわち、京城帝国大学の支那哲学講座も、日本儒教を中心とする研究機関としての役割が要求されており、さらに朝鮮という日本の一地方の儒教、とりわけ日本思想の一部となる「朝鮮儒教」の研究所として扱われたのである。

二、経学院と京城帝国大学の儒教研究

1. 経学院と京城帝国大学

前述したように、朝鮮総督府の儒教政策が最も関与していた機関は「経学院」であった。1911年6月15日、成均館に設置された経学院は、総督府の社会教化の機関として朝鮮人に対する教化活動を担当したのである²⁶⁾。寺内総督は1911年6月15日、経学院規程（総督府令第7号）を公布し、明治天皇の恩賜金25万ウォンを基金として経学院を設置した。同年9月成均館を廃止し、その業務を経学院に継承させた²⁷⁾。経学院規程第一条には、「経学院ハ朝鮮総督ノ監督ニ属シ経学ノ講究ヲ為シ風教徳化ヲ裨補スルコトヲ目的」とすると明示されている²⁸⁾。「経学院ニ関スル件」（明治44年、六 総訓第六五号）に「今回経学院ヲ設立シタル趣旨ハ其ノ規程ノ示スカ如ク経学ヲ講シ文廟ヲ祀リ教化ヲ裨補セシムルニ在リ」²⁹⁾と述べているように、総督府は経学院を設置しながら従来の教育機能は廃止し、その機能を儒教的社会教化に制限させた。成均館の儒教教育機能を消す代わりに、前近代的儒教理念を助長して新学問やキリスト教のような反日的近代思想に対する理念的対抗物を育成し、まだ一定の社会的影響力を有している地方の儒林を植民統治のための民衆教化に動員しようとすることに経学院の設置意図がうかがえる³⁰⁾。

経学院において京城帝国大学の教員と最も関連するのは、『経学院雑誌』の出版と講演会であった。経学院は、1913年の12月から『経学院雑誌』を季刊で発行し、これに顧問として加わった高橋は、「儒教の根本義」（『経学院雑誌』第10号、1916年）と「儒教の庶民的発展」（『経学院雑誌』第15号、1917年）、「高山書院重興祝辞」（『経学院雑誌』第17号、1918年）の3点を掲載した。雑誌編集に従事する職員は、総督府の管理やその周辺人物である小田省吾、高橋亨、太田秀穂などが編集顧問となっていたが、結局彼らが雑誌編集を内面的にコントロールし、また経学院の諸活動を「指導」していた³¹⁾。高橋以外にも、同僚兼師友であった呂圭亨や鄭万朝、および後の京城帝国大学の同僚である小田省吾も顧問として参与していた³²⁾。

『経学院雑誌』の出版は、寺内総督が1913年3月17日に発表した訓令「経学院ノ任務ニ関スル件」と、同年5月21日制定の「経学院雑誌編纂ニ関スル要項」（学務局第1272号承認）によるものであった。雑誌はハングルと漢文を使用して年4回各一千部を発行し、経学院職員、各道長官および参与官、府郡守、各郡郷校職員などに配布されることになっていた。雑誌記事の内容は、「経学に関する論説、経学講演の筆記、講師および彼の寄稿、内外大家の論説、新聞および書籍の翻訳、新制趣旨の普及、必要な法令、

26) 注1所掲の柳美那「19c 말-20c 초 日本帝國主義의 儒教 利用과 朝鮮 支配」129-130頁。

27) 注1所掲の柳美那「日本の '朝鮮 臣民化' 政策과 儒林 動員의 実態」15頁。

28) 「経学院規程」（『朝鮮総督府官報』第237号、1911年6月15日）101頁。

29) 朝鮮総督府学務局学務課編纂『朝鮮学事例規』（朝鮮教育会、1935年）935頁。

30) 注1所掲の鄭圭永「朝鮮総督府의 朝鮮儒教支配」61頁。

31) 注1所掲の鄭圭永「朝鮮総督府의 朝鮮儒教支配」63頁。

32) また、1920年にはソウルに儒道振興会が設けられ、同年冬には雑誌も出版することになる。高橋は、『儒道』第1号に「儒林界에 警告」（儒道振興会、1921年）を載せ、韓国儒教界の先輩としてこれからの儒道振興会の在り方についてアドバイスをした（高橋亨「儒林界에 警告」『儒道』第1号、儒道振興会、1921年、13頁）。

講師の地方報告、詩文」などと定められた。また、雑誌の編集においては、総督府の学務局が「内閣」、つまり事前検閲を行なうようになっていた³³⁾。主に韓国人の投稿が多かったが、宇野哲人、服部宇之吉、井上哲次郎など日本の著名な儒教研究者を講演会に招聘し、雑誌にその内容を載せることもあった³⁴⁾。服部は「仁義斗 現代思潮」（『経学院雑誌』第26.27号、1925-1926年）を連載したこともある。藤塚も1926年9月15日に「君子之道」、1931年3月23日に経学院春樹稔尊後「孔孟の弟子と就職問題」という講題で講演を行なった。しかし、『経学院雑誌』に藤塚の論文や講演記録はみられない。

2. 明倫学院と京城帝国大学

経学院に儒教の教育機関が開設されたのは経学院設立後約20年が経過した1930年の4月であった。1919年の三・一独立運動後に就任した斎藤総督は、みずから儒教に格別な関心を持っている人物であり、朝鮮儒林勢力を朝鮮統治に積極的に利用しようとする意図を持っていた³⁵⁾。最終的には、これらの機関を通して、全国の儒林を包摂し、日本的儒教を普及することがその目的であった。

儒林とは朝鮮に於ける儒教の研究と普及とを目的とする一種の団体にて、全鮮各道に散在する二百四十一の文廟を守り、文廟は各、土地を所有し、その総価格は六七百万圓に上り、その収入にて各地各郡に郷校を設け、支那式儒教を説き、支那の中華に対し、朝鮮を小華と称した程に支那崇拜の思想を教ふ。従って、日本精神と全然一致しない。故に此等の人々を日本化する方法として、経学院と明倫専門学院の設がある³⁶⁾。

明倫学院は、1930年に「儒学に関して教授することと共に人格を陶冶すること」という目的を標榜し、教育を担当する経学院の付設機関として設立された。柳美那は、その設立の目的が1936年の総督府の「心田開発」政策と朝鮮人に対する教化政策の強化によって、「国民道徳の本義を闡明すること」に変わり、1939年明倫専門学院に改編することによって戦時下総動員体制に編入されたと指摘している³⁷⁾。さらに1944年には「明倫錬成所」と改編された。その学校編成と目的の変化は【表1】のとおりである。

33) 注1 所掲の鄭圭永「朝鮮総督府의 朝鮮儒教支配」62頁。

34) 1921年9月11日 宇野哲人「一貫之道」。

1922年9月26日 服部宇之吉「知天命説」。

1925年3月4日 井上哲次郎「孔子の天の概念について」。

35) 注1 所掲の鄭圭永「朝鮮総督府의 朝鮮儒教支配」、69頁。

36) 伊藤猷典『鮮満の興亜教育』（東亜教育叢書）、目黒書店、1942年、18-19頁。

37) 注4 所掲の柳美那「戦時体制期 朝鮮総督府의 儒林政策」329頁。

【表1】時期による明倫学院の学制と目的³⁸⁾

年代	名称	授業年限	科目	設置目的
1930年 2月26日	明倫学院	2年正科	教科目：儒学及儒学史、国語、東洋哲学、漢文学及公民科	明倫学院ハ儒学ニ関スル教授ヲ為シ併セテ人格を陶冶スルヲ目的トス ³⁹⁾
1933年 2月16日	同上	2年より3年に延長(定員：正科60名以内、補習科30名以内)	経学、儒学史、東洋哲学、漢文学、国語、公民科及体操	同上
1936年 3月4日	同上	本科3年、研究科2年及三年(定員：本科90名以内、研究科20名以内)	本科ノ学科目：経学、儒学史、支那哲学、国語、漢文、国史、教育学、公民科及体操 研究科ノ研究科目：経学、子学、支那哲学、支那文学、支那史学及作詩文	明倫学院ハ儒学ヲ講究シ国民道徳ノ本義ヲ闡明シ併セテ人格ヲ陶冶スルヲ以テ目的トス ⁴⁰⁾
1939年 2月18日	明倫 専門学校	本科3年、研究科2年以上(定員：本科90名、研究科20名)	本科ノ学科目：国民道徳、経学、儒学史、支那哲学、支那文学、国語、国史、社会教育、体操、教練、支那語(11科目) 研究科ノ研究科目：経学、子学、支那哲学、支那文学、支那史学及作詩文(六科目)	明倫専門学校ハ皇国精神ニ基キ儒学ヲ研鑽シテ国民道徳ノ本義ヲ闡明シ忠良有為ナル皇国臣民ヲ養成スルコトヲ以テ目的トス ⁴¹⁾

以上からわかるように、最初は「儒学ニ関スル教授」と「人格を陶冶スル」ことを標榜して2年の本科を運営すると同時に短期講習会も開いていたが、1939年からは露骨的に「皇国精神ニ基キ儒学」とりわけ「皇道儒学」の実施を図り、日本に協力的な儒林の養成を謀った⁴²⁾。1939年は、高橋亨が「王道儒教より皇道儒教へ」(『朝鮮』第295号、朝鮮総督府)を発表した時期でもあった。

1930年4月10日、新設された明倫学院において京城帝国大学の教員高橋亨と藤塚鄰が講師を命じられた⁴³⁾。高橋は1931年からは講師を勤める傍らその評議員ともなった⁴⁴⁾。その「高橋亨先生年譜略」に「嘗て経学院内に明倫学院を置き儒生の教育に尽力したる機縁に依る」⁴⁵⁾となっていることは、恐らくこのようなことを含めているのであろう。

明倫学院総裁は、経学院大提学の鄭萬朝が兼任した。鄭萬朝(1858-1936)は、高橋と共に1911年『朝鮮図書解題』の作成に参加したことが機縁になり、師友として高橋に韓国の儒教について多くアドバイスをした人物であった⁴⁶⁾。高橋が編集した父高橋茂一郎(翠村、1854-1944)の文集『静雲精舎存稿』(慶

38) 注4所掲の柳美那「戦時体制期 朝鮮総督府の儒林政策」の【表1】を基に、『朝鮮総督府官報』および『経学院雑誌』の内容を修正・追加して作成。

39) 「附明倫学院規程又学制抄録」(『経学院雑誌』第34号、1932年3月)39頁。

40) 「府令」(『朝鮮総督府官報』1936年4月16日)。

41) 「府令」(『朝鮮総督府官報』1939年3月07日)。

42) 琴章泰『現代韓国儒教の伝統』(ソウル大学出版部、2003年)55頁。

43) 『朝鮮総督府官報』昭和第983号(1930年04月16日)3面。

44) 国史編纂委員会の職員録資料参考(<http://db.history.go.kr>)。職員録資料からは、1939年まで明倫学院で講師および評議員と任命されたことが確認できる。

45) 『朝鮮学報：高橋先生頌寿記念号』第14輯(朝鮮学会、1959年)11頁。

46) 「而して茂亭と私とは曩には朝鮮古書解題事業に参して同僚となり、後に経学院に於いて又京城大学に在りて同僚となった。茂亭と私とは前後三十年忘年談心の友誼を続して渝る所なく、私は茂亭に由りて教へられる所実に限りな

寿会、1930）には鄭萬朝が跋文を載せている⁴⁷⁾。鄭萬朝は、京城帝国大学の講師としても活動し、京城帝国大学内の講演会でも講演を行なったことがある⁴⁸⁾。また、高橋は鄭萬朝と呂圭亨の遺稿を整理し、『朝鮮学報』に「茂亭遺草引」（1957年）と「荷亭遺作——演本沈清伝」（1958年）を発表したこともある。

講師となった高橋と藤塚は、正科の学生を対象とする講義や、一般人を対象とする講習会などを行なった。1931年には明倫学院から一般社会に対する事業の一環として東洋思想に関する「東洋思想講習会」が、高橋と藤塚および武部欽一によって行なわれた⁴⁹⁾。

3. 朝鮮儒道聯合会

朝鮮儒道聯合会は、1939年10月16日に開催された「第一回全鮮儒林大会」を機に発足した団体で、朝鮮全道の儒林を戦時動員組織として再編しようとした翼賛体制であった⁵⁰⁾。「第一回全鮮儒林大会」で提唱された儒道の精神は、次のようである。

朝鮮儒道聯合会は半島大衆中儒道を崇奉し一般民衆の儀範となり、其の指導的階級に在る儒林二百有余万が目下推移しつゝ、ある世情に目醒め画期的大発心の下に、昭和十四年秋季釈尊祭を機として皇道精神を発揮すると共に、益々儒道の眞髓を闡明し、東亜の大同団結の態勢を強化して協心戮力、時艱を克服、以て盡忠報国の至誠を効さんとして全鮮儒林大会を京城に開催し

- (一) 経学院を中心として全鮮儒林の連絡統一ある団体を組織し、皇道精神に基く皇道儒学を確立すること。
- (二) 国民総力運動の趣旨に賛同し一致協力皇国臣民たる信念を固くし、以て臣道の実践に邁進すること。
- (三) 東亜新秩序建設の国是に則り東洋文化の眞髓を闡明し、以て日滿支永久平和の為精神的聯繫を固くすること⁵¹⁾

いものがある。殊に朝鮮士流の学問文章政論党論等に至りては大部分茂亭の垂示に待った。茂亭は私の師友である。（中略）高橋亨「朝鮮の陽明学派」（『朝鮮学報』第4輯、1953年）155頁。

47) 「先生之嗣文学博士亨。亦世其学。而与我善。図書之府。大学之部。明倫の院。俱有僚縁。因獲読先生所著一摺而知全鼎矣。日者先生門人。文学士多田正知君等。……又多田君之請勤。故楽之言。」

48) 「京城帝大에서 朝鮮文学講演」（『東亜日報』1932年06月18日）5面。

49) 経学院『経学院雑誌』第34号（経学院、1932年3月）40頁。

時期	講師	講題	聴講員数
1931年3月25日	高橋亨	東洋思想から世相を觀す	59名
	武部欽一	儒学振興의 必要	同
1931年3月26日	高橋亨	東洋思想から世相を觀す	67名
	藤塚鄰	論語의 研究	同
1931年3月27日	高橋亨	東洋思想から世相を觀す	61名
	藤塚鄰	論語의 研究	同

50) 注17所掲の永島弘紀「朝鮮総督府の「社会教育」と「地方改良」」203頁。

51) 「儒道の振興」朝鮮総督府学務局社会教育課『朝鮮社会教育要覧』昭和十六年十二月（渡部学・阿部洋編『日本植民地教育政策資料集成（朝鮮篇）』第51巻所収）。

こうして、皇道精神に加え、儒道の振興と全朝鮮の儒林の連絡統制を目的として朝鮮儒道聯合会が結成された。総裁としては大野緑一郎政務総監が推戴された。朝鮮儒道聯合会の発足に伴い、機関誌として『儒道』が出版された。『儒道』は「本会事業の普及徹底を図ると共に、他面儒林各層の連絡教養に資し以て斯道振興の指針たらしめん」⁵²⁾ことを目的として創刊され、第1号から7号まで刊行された。

前述したように、高橋は同年12月『朝鮮』第295号に「王道儒教より皇道儒教へ」を発表し、総督府の政策に同調する立場を鮮明にしていた。これらの活動を踏まえ、高橋は京城経学院提学および明倫鍊成所長、朝鮮儒道連合会副会長をつとめた。『儒道』の発刊に伴い、高橋が提唱した「皇道儒学」に関する論説が多く載せられた。阿部吉雄も京城帝国大学に赴任してから間もなく、『儒道』に『儒道』に「李退溪と山崎闇斎」⁵³⁾と「浅見綱斎と退溪・栗谷」⁵⁴⁾、「わが文教思想に於ける李退溪」⁵⁵⁾を発表したが、これも皇道儒学的色彩が強いものであった。さらに1944年には朝鮮儒道連合会によって、高橋亨と喜田新六による共著で、藤塚鄰が監修した『国体明鑑』が出版された。

三、学内外における学術活動

1. 京城帝国大学内の研究雑誌と講演会

京城帝国大学の医学部は季刊誌『THE KEIZYO JOURNAL OF MEDICINE』を創刊し、韓国における近代医学確立に影響を及ぼし、法文学部では法科系（法律・政治・経済）を中心に『法文学会論集』が刊行され、後に『法学会論集』、『法学会論纂』などに名前を変えて1942年まで13冊を刊行した。文科系（哲学・文学・史学）は1929年から『法文学会第二部論纂』が刊行され、1935年からは『文学会論纂』に名を変えて刊行されていた。これらすべての論文集においては「帝大アカデミズム」を反映した専門性の高い論文が相当載せられていたのが特徴である。『朝鮮経済の研究』（第二）、『朝鮮社会経済史研究』（第六）、『朝鮮社会法制史研究』（第九）などの特集号は感情論や愛国主義的立場を払拭し、客観的・実証的研究を試みた研究を掲載していた。しかし、これらの一連の研究の中には当然のことながら朝鮮総督府との共同調査・研究および植民地支配の正当化に繋がる研究論文も含まれていた⁵⁶⁾。

高橋は、京城帝国学会法文学会第二部論纂第一輯『朝鮮支那文化の研究』に「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」（刀江書院、1929年）を発表した。この論文は、それ以後の韓国儒教史の枠組みを作ったと評価されるものであった⁵⁷⁾。藤塚は、同論纂に「李朝の学人と乾隆文化」、附録として「高麗版龍龕手鏡解説」の影印を載せた。『文学会論纂』に変わってからは、「文学篇」や「哲学篇」など分野ごとに分けられて出版されたが、高橋は『文学会論纂』に「嶺南の民謡に現れたる女性生活の二筋道」⁵⁸⁾と

52) 朴沢相駿「創刊に際して」（『儒道』第1号、朝鮮儒道聯合会、1942年）2頁。

53) 『儒道』第2号（朝鮮儒道聯合会、1942年10月）。

54) 『儒道』第3・4号（朝鮮儒道聯合会、1943年1・8月）。

55) 『儒道』第6号（朝鮮儒道聯合会、1944年04月）。

56) 馬越徹『韓国近代大学の成立と展開』（名古屋大学出版会、1995年）131-132頁。

57) 尹絲淳「『高橋亨斗 韓国儒学観』 검토」（『韓国学』12、韓国学研究所、1976年）24頁。

58) 『京城帝国大学文学会論纂』第6輯（記念論文集文学篇、京城帝国大学文学会編、大阪屋号書店、1939年）。

「朝鮮のユーモア」⁵⁹⁾を發表し、文学部を中心に活動した。一方、藤塚は、この論纂で金正喜に関する精密な研究論文を發表した。次のとおりである。

藤塚鄰「金秋史の入燕と翁・阮二経師——清朝文化東漸の一断面」⁶⁰⁾

——「翁覃溪の研経指導と金秋史——蘇斉手札四封の考覈」⁶¹⁾

——「清朝文化東漸史上に於ける李月汀と金阮堂」⁶²⁾

これらの論文が、博士論文「李朝に於ける清朝文化の移入と金阮堂」の骨子であることは言うまでもない。この『文学会論纂』には、京城帝国大学の教員としての高い水準と専門性を有する論文が掲載されたのである。

京城帝国大学では論纂の編纂のほか、「朝鮮語文学会」や「哲学会」などの大学内研究組織が作られ、それぞれ一般人向けの公開講演も多数行なわれた。たとえば、高橋は京城帝国大学朝鮮文学会の「朝鮮学講演」において「権清臺ノ学説ニ就イテ」というテーマで講演を行なった⁶³⁾。また、京城帝国大学法文学部の「哲学会」では帝大哲学講演が開かれ、藤塚もそのメンバーとして講演を行なったことがある⁶⁴⁾。藤塚の講演はかなり人気があったようで、坡州で行なわれた講演会では聴講生で超満員だったという⁶⁵⁾。その他、藤塚は日本学術振興会朝鮮委員会が主催した「講演と映画の会」で「儒道精神」で発表を行なった⁶⁶⁾。

2. 『朝鮮』『朝鮮及満州』『文教の朝鮮』『青丘学叢』などの植民地朝鮮における雑誌

植民地朝鮮において、京城帝国大学の教員の論文や随筆などがよく載せられた雑誌として『朝鮮』『朝鮮及満州』『文教の朝鮮』『青丘学叢』などを挙げることができる。『朝鮮』は朝鮮総督府が刊行していた機関誌で、1920年7月から1944年11月まで毎月発刊された。『朝鮮及満州』は、前身である『朝鮮』（総督府機関誌『朝鮮』とは別の雑誌）が1912年1月から『朝鮮及満州』に雑誌名を変え、1941年1月まで毎月刊行された。日韓書房から刊行され、後に雑誌と名称を合わせるため発行局が朝鮮及満州社と改称された。『文教の朝鮮』は、朝鮮教育会が刊行する月刊総合雑誌で、1925年9月から1945年1月まで発行された。『文教の朝鮮』は主に教育に従事する朝鮮教育会の会員に配布された雑誌であった。『青丘学叢』は、1930年京城帝国大学の法文学部と朝鮮総督府の朝鮮史編修会の幹部たちによって、朝鮮および満州などを中心に極東文化を研究するため作られた「青丘学会」の季刊誌であった。興味深い点は、『朝鮮』

59) 『京城帝国大学文学会論纂』第8輯（語文論叢、京城帝国大学文学会編、岩波書店、1939年）。

60) 『京城帝国大学文学会論纂』第1輯（東方文化史叢考、京城帝国大学文学会編、大阪屋号書店、1935年）。

61) 『京城帝国大学文学会論纂』第4輯（記念論文集哲学篇、京城帝国大学文学会編、岩波書店、1939年）。

62) 『京城帝国大学文学会論纂』第7輯（史学論叢、京城帝国大学文学会編、岩波書店、1939年）。

63) 「朝鮮学講演」（『東亜日報』1933年10月14日）3面。

64) 「帝大哲学講演」（『東亜日報』1933年11月15日）3面。

65) 「藤塚教授講演会」（『東亜日報』1938年6月12日）3面。

66) 「講演と映画 廿九日府民館」（『東亜日報』1939年11月24日）3面。

と『青丘学叢』にはそれぞれ高橋と藤塚の研究論文が載せられているが、高橋は主に『朝鮮及満州』を中心に、藤塚は『文教の朝鮮』を中心に活動していたことである。

『朝鮮』には、京城帝国大学の教員の論文が多数載せられていた。高橋は、早くから『朝鮮』に教育や仏教に関する論文や随筆を投稿していたが、儒教に関するもののみ紹介すると「朝鮮の儒教」（『朝鮮』第239号、1935年4月）および「道儒道より皇道儒道へ」（『朝鮮』第295号、1939年12月）がある。一方、藤塚の場合、「中庸懷疑説の再検討」（『朝鮮』第214・215・216・223号、1933年）を連載し、「『阮堂集』及び『阮堂先生全集』に誤入せる清儒の名文」（『朝鮮』第276号、1938年05月）や「『阮堂集』誤入文の再検討と清儒阮元・梁章鉅の展望」（『朝鮮』第279号、1938年08月）を発表した。

『朝鮮及満州』には高橋の韓国儒教研究の始まりとなる論説が載せられている。「朝鮮儒学大観」⁶⁷⁾（第50-52号、第58・62・64号、1912年）の連載がそれである。これは近代韓国における退溪に関するまとまった初めての著作とされる⁶⁸⁾。1917年に書かれ、1922年に刊行された韓国初の儒教通史といわれる張志淵（1864-1921）の『朝鮮儒教淵源』の執筆動機は、「朝鮮儒学大観」の朝鮮儒教史に関する誤解と歪曲に対する批判であった。また、高橋は同年「朝鮮の仏教に対する新研究」（第60号）を発表したが、それも従来の仏教研究とは異なる方法論で書かれたものであった。

『文教の朝鮮』には、藤塚の論文が多く見られる。それら論文は以下の通りである。

「四庫全書編纂と其の環境」（第10号、1926年6月）

「高麗版竜龕手鏡解説」（第53号、1930年1月）

「五倫教義発展の史的考察」（第89-91号、1933年1-3月）

「清朝文化研究の動機及其過程——朴斎家と私」（第122号、1935年10月）

「漢書進講御奉仕の大任を果し奉りて」（第139号、1937年3月）

「漢書進講御奉仕の大任を果し奉りて」（第154号、1938年6月）

「教学と道德」（第169号、1939年9月）

「故事熟語大辞典の誤謬を糾す」（第175号、1940年3月）

特に、「清朝文化研究の動機及其過程——朴斎家と私」は藤塚が金正喜を中心とする清朝文化東伝を研究する契機について述べており、藤塚の韓国儒教研究の始まりを窺うことができるものである。

『青丘学叢』には、韓国儒教に関する論文はさほど見られないが、評議員であった高橋と藤塚の例会の参加や論文の発表⁶⁹⁾などの活動がわかる情報が載っている。また、京城帝国大学文学部の講義科目名を「彙報」に載せているので、韓国儒教関連講義の様子が確認できる。藤塚は第21号に「阮堂集及び阮堂全集の検討」（1935年）を載せている。

67) 後に訂正が加えられて1924年『朝鮮史講座』に再録された。

68) 井上厚史「近代日本における李退溪研究の系譜学」（『総合政策論叢』第18号、島根県立大学、2010年2月）74頁。

69) 「併合前に於ける朝鮮学校の実況」（『青丘学叢』第12号、1933年）。

3. 東方文化学院

東方文化学院は、東京の服部宇之吉と京都の狩野直喜が「支那文化研究所」に関する協議を行ない、支那文化研究所設立趣意書を外務省に提出したことにより、1929年4月に発足した。東方文化学院は「本学院ハ支那文化ノ研究及其ノ普及ヲ図リ一般文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的」⁷⁰⁾とし、主に研究所の経営、研究及研究資料の発表、有益なる古書の複製、其他理事会の決議に依り必要と認めたる事業を行ない、雑誌『東方学報』を刊行した。事務所は、東京帝国大学付属図書館内に置かれ、東京および京都にそれぞれ研究所が設けられた。初代メンバーとして理事長に服部宇之吉が、理事に宇野哲人や狩野直喜を含む6名の支那学研究者が任命された。

支那学を中心として集まっていたため、東方文化学院は京城帝国大学の支那哲学講座の教員たちとも深い関連を持っていた。阿部吉雄は1930年から東方文化学院東京研究所の助手として活動し、後に研究員となった。彼は、第7回の講演会で「宋儒ノ教育思想ト其態度」（1938年5月7日）を、第11回の講演会で「日支ノ教育史上ニ於ケル朱子ノ小学」（1940年3月22日）を講演した。『東方学報』（東京）には、1935年5号に「図書館と観書の数種——北支満鮮調査旅行報告書」、1936年6号「東方文化学院東京研究所経部礼類善本に就いて」、1940年11号に「支那教育史上に於ける朱子の小学」を発表している。阿部が京城帝国大学に赴任する前の段階として東方文化学院で活動したのに対し、高田真治と藤塚鄰は京城帝国大学退職後に東方文化学院のメンバーとして活動した。高田と藤塚は役員（平議員）をつとめるとともに、高田は第9回の講演会で「天命ノ帰趨ト新民ノ要義」（1939年5月2日）について発表、藤塚は第16回の講演会で「徂徠学ノ西漸ト清李両朝ノ学壇」（1942年11月4日）について発表した⁷¹⁾。

4. 斯文会と雑誌『斯文』

斯文会は、1880年に東洋の学術文化の交流を意図した岩倉具視が、谷干城らとはかつて創設した「斯文学会」を母体とし、これが発展して1918年公益財団法人斯文会となった。主に漢学の振興を目指しながら、孔子祭の挙行、公開講座の開講、学術誌『斯文』の発行などを中心に活動を行なった。この時期の斯文学会は、欧化主義の風潮に対抗して、天皇制国家を確立する一方、大正年間の民主主義と社会主義の諸思潮が風靡していた時期に、「教育勅語」の翼賛を明示し、漢学を振興しようとする目的を持っていた⁷²⁾。「斯文会趣意書」にそのような趣旨を見ることができる。

教育勅語の聖旨は儒道を藉りて益闡明せらる可く儒道の本義は教育勅語によりて益権威を加ふ可しこれ我が同志相謀り同憂相会し大に儒道を振起し以て教育勅語の聖旨を宣揚せんことを期する所以なり。…儒道を以て本邦固有の道德を鼓吹し精神的文明の振興に努め彼の利用厚生に関係ある物質的文明の発達と相伴ふを得しめんとす果して此くの如くなるを得ば永く国運の隆昌を増進し戦後の

70) 東方文化学院編『東方文化学院一覽』（東方文化学院、1929年）。

71) 東方文化学院編『東方文化学院一覽』（東方文化学院、1944年）。

72) 陳璋瑋「斯文学会の形成と発展」（『中国哲学論集』21号、九州大学中国哲学研究会、1995年12月）98頁。

世界に萬邦に卓越せる我が国体の光輝を發揚するに足らん⁷³⁾。

斯文会は国家団体ではないものの、「儒道を以て本邦固有の道徳を鼓吹し精神的文明の振興に努め」という趣旨は経学院が追及する儒教の性格と相通している。また、齋藤総督が斯文会のメンバーであったこと、斯文会が東京帝国大学の漢学者・中国学研究者で構成されていたことなどを考えると、斯文会や総督府の儒教機関とは必然の関連性を持っていた。特に、斯文会の会員の中で東京帝国大学の漢学科を中心にする重要メンバーが、経学院の積奠に参加および講演を行なった⁷⁴⁾。前述したように、宇野哲人や⁷⁵⁾と井上哲次郎⁷⁶⁾が経学院で行なった講演などがそれであった。

京城帝国大学の韓国儒教研究者が東京帝国大学の漢文科(支那哲学科)出身であることを想起すれば、彼らが斯文会のメンバーであったことは、むしろ当然であった⁷⁷⁾。終戦前まで『斯文』に載せられた高橋・藤塚・阿部の論文を挙げると次の通りである。

高橋亨「朝鮮に於ける儒教」(『斯文』第5編2号、1923年)

——「朝鮮官本論語諺解に就て」(『斯文』第13編4・5号、1931年)

——「朝鮮に於ける朱子学」(『斯文』第13編11号、1931年)

——「李退溪」(『斯文』第21編11・12号、第22編1・2・3号、1939-1940年)

藤塚鄰「詹詹録」(『斯文』第1編6号、第2編1・3号、1919-1920年)

——「金阮堂を繞る日・鮮・清の文化交流」(『斯文』第22編7・8号、1940年)

阿部吉雄「閩齋学の設立過程」(一)(二)(『斯文』第15編1・2号、1933年)

——「山崎閩齋と李退溪」(『斯文』第26編6・7号、1944年)

藤塚と阿部の場合、渡韓前にも『斯文』に投稿したことがあるが、韓国滞在期においてそのテーマが変わっていたことが確認できる。いずれにせよ、彼らは雑誌『斯文』を通して、韓国での研究業績を日本に発信していたのである⁷⁸⁾。以上のことからわかるように、韓国で行なわれた韓国儒教研究は韓国内部だけではなく、『斯文』などの学術雑誌を通じて日本内地まで知られていた。

73) 「斯文会趣意書」(斯文会編『斯文六十年史』斯文会、1929年)317頁。

74) 注1所掲의박영미「経学院에 보이는 近代 日本 儒学의 傾向」113頁。

75) 1921年9月11日に「一貫之道」を講演。

76) 1925年3月4日に「孔子の天の概念について」を講演。

77) その内、藤塚は1948年1月に斯文会の理事長となった。

78) 斯文会は『斯文』の外、支那学に関する会員の論文を収載した『支那学研究』を出版した。『支那学研究』は斯文会創立50年記念として創刊され、年1回刊行される予定であったが、1929年・1932年・1933年・1935年に一編ずつ、計四編が刊行された。『支那学研究』第四編には藤塚や助教授であった高田真治、加藤常賢の論文が載せられているが、主に中国哲学に関するものである。

5. 漢学会の雑誌『漢学会雑誌』

1932年に東京帝国大学文学部支那哲学研究室を中心に漢学会が成立し、1933年に機関雑誌『漢学会雑誌』第1巻が発刊され、1944年まで第14巻が刊行された。『漢学会雑誌』について宇野哲人は「東京帝国大学支那哲学支那文学科を中心とし有志胥謀り同窓の懇親を敦くすると共に學術の研鑽に資せんが為め漢学会の刷新を図り新たに規約を設定し著々事業の進捗を為すに当たり機関雑誌漢学会雑誌第一号の刊行を見る」⁷⁹⁾とその目的と意義を表している。塩谷温は、『斯文』に少壯年研究者の投稿が少ないと指摘し、関学会雑誌には「遠慮なく新しい研究を発表」⁸⁰⁾するよう励ましていた。『漢学会雑誌』は同窓会の機関雑誌の性格を有し、東京大学支那哲学科の教員や卒業生の動向なども紹介している。漢学会は雑誌の発刊のほか、毎月例会を開き、全国漢学学術大会を開催した。

京城帝国大学支那哲学講座の教員の大部分は、『漢学会雑誌』に多数の論文を投稿していた。なかでも藤塚鄰と阿部吉雄による論文が多く、高橋亨の論文は見られない。本雑誌に載せられている京城帝国大学韓国儒教研究者の論文を挙げると次のとおりである。

- 藤塚鄰「汪孟慈の所謂海外墨緑の草本と金阮堂」（『漢学会雑誌』第3巻第2号、1935年）
- 「汪孟慈と金阮堂——清朝文化東漸の一断面」（『漢学会雑誌』第4巻第2号、1936年）
- 「中庸秦漢儒作説の検討」（『漢学会雑誌』第5巻第2号、1937年）
- 「何晏の論語集解に関する二三の考察」（『漢学会雑誌』第7巻第1号、1939年）
- 「日本刻皇侃論語義疏の清朝経学に及ぼせる影響」（『漢学会雑誌』第8巻第3号、1940年）
- 「清・鮮文化交流の一断層——金阮堂自画賛歳寒図を中心として」（『漢学会雑誌』第10巻第2号、1942年）

- 阿部吉雄「山崎闇斎の著書に就いて（一）」（『漢学会雑誌』第1巻第1号、1933年）
- 「山崎闇斎の著書に就いて（二）」（『漢学会雑誌』第1巻第2号、1933年）
- 「三宅尚斎の庶民小学教育説と培根達支堂——朱子小学説の一展開」（『漢学会雑誌』第8巻第1号、1940年）

『漢学会雑誌』には、藤塚と阿部の論文のみならず、京城帝国大学支那哲学講座の助教授であった高田真治、加藤常賢の論文も多数載せられていた。日本・韓国・中国・欧米における漢学関係書籍および論文目録を掲載するほか、会員消息では、加藤常賢の中国留学の話や、1932年ソウルの三越ギャラリーで行なわれた「阮堂金正喜遺墨遺品展覧会」などの記事も掲載され、当時日本内外での動向の把握や紹介も行なっていた。

藤塚の場合、京城帝大時代から帰国後の間、日本の学術雑誌の中では『漢学会雑誌』に最も研究論文を投稿している。論文の題目からも推測できるように、『漢学会雑誌』に載せられた論文は、おおむね

79) 宇野哲人「発刊に際して」（『漢学会雑誌』第1巻第1号、漢学会、1933年）1頁。

80) 塩谷温「発刊に際して」（『漢学会雑誌』第1巻第1号、漢学会、1933年）6頁。

『清朝文化東伝の研究』に収録されたものであった。それらは日本学術における本格的な金正喜研究論文の嚆矢でもあった。

おわりに

本論文では、総督府の儒教政策にもとづく儒教研究および教育の変化を考察し、京城帝国大学の韓国儒教研究者たちの多様な研究活動を検討した。「儒教」は植民地朝鮮の経営する際の重要なキーワードであった。日本政府と朝鮮総督府は、各地で影響力を有している儒林勢力を牽制しつつ彼らを日本統治に協力させようとした。その中心に「経学院」があったのである。一方、経学院から排除された儒教教育機能および学術研究の機能は、京城帝国大学に移行し、明倫学院の開校後は教育などにおいて緊密な協力関係を維持した。

韓国での実務経験を有していた官僚は、かつて韓国運営における儒教の重要性を認識していた。幣原坦は1905年、成均館を大学として改編する案を提出し、斎藤実総督は1926年京城帝国大学に漢学科を設置する計画を立てていた。しかし、その計画は日本政府から認められず、儒教政策の中心となる経学院も1930年の明倫学院の設立時まで教育的機能は認められなかった。そこで、経学院と協力して学術的機能を補ったのが京城帝国大学の韓国儒教研究者であった。高橋と藤塚は、経学院が開催する講演会に参加するほか、明倫学院の設立後はその講師を兼任し、学生を指導した。そして、朝鮮儒道聯合会が発足すると、経学院のメンバーや阿部および日本斯文会の会員は、機関誌『儒道』に皇道儒学を提唱する論調の論文を発表した。京城帝国大学の韓国儒教研究は日本総督府によって植民地政策の利用対象と見なされ、儒教政策に応じる研究が要求された。

しかし、京城帝国大学は「帝国」の機関でありながらも、「大学」という研究・教育機関としてのアイデンティティーも有していた。法文学部の教員らは、定期的に『論纂』を出版し、京城帝国大学の学術研究にふさわしい高い水準の論文を発表した。そして、植民地韓国で刊行されていた雑誌『朝鮮』『朝鮮及満州』『文教の朝鮮』『青丘学叢』にも、活発に論文を発表していた。特に、それらの成果の多くは京城帝国大学のなかで創られていった「韓国学」と関連するものであった。韓国儒教研究は、正規講座としては作られていなかったため、高橋と藤塚を中心として、それぞれの機関と雑誌を通じて個別的に行なわれていた。

一方、彼らは京城帝国大学に在籍しつつ、日本の学術界との深いつながりを維持していた。東方文化学院や斯文会などは東京帝国大学出身のメンバーが主となっており、渡韓前から会員として活動していた学会が、彼らの主な活動舞台であった。京城帝国大学に赴任以後の研究は、韓国儒教と関連するものであり、それらの研究成果は日本の学界においても紹介されるようになった。日本においても活発に研究活動をなっていたことから、彼らの学的基盤は日本の学術界にあり、そうすることが結局帰国後の研究活動のためにも重要であったと考えられる。

東京帝国大学と京城帝国大学の人脈を通じて、宇野哲人・井上哲次郎などの研究者も韓国を訪問し、『経学院雑誌』や『儒道』などの雑誌に投稿していた。植民地韓国で行なわれていた日本人学者の研究活動は、日本の学術と断絶しておらず、学的・人的方面において密接にかかわっていたのである。